

石彫刻の平和学

浅賀正治

はじめに——石の産地に生きる

茨城県桜川市岩瀬——その名のとおり、ここは日本で有数の石の産地として知られている。私がこの地を彫刻活動の拠点に決めたととき、恩師・小金丸幾久先生は「畏敬の念を失くしてはならない」とおっしゃった。県内に石材店が五百軒以上も集まるような地域ともなれば、人は石の扱いに慣れ、石をたんなる商品とみなしてしまうこともあるという。墓石を取り扱う業者も、受注件数ばかりを気にして、その背景にあるはずの死

を弔う意味や神聖さを見失いかねない。だからこそ先生は、人への畏敬の念や石をめぐる神聖さについて教えてくださったのだと思う。

小金丸先生は、私が一彫刻家として食べていけるように、実生活の暮らし方を万般にわたって指導してくださった。石彫刻については、「社会や人の求めに応じて考えを変えながら作品を彫ることが重要だ」といつも口にされていた。「求められるものを彫り、注文客や鑑賞者を呼ぶ」——この教えのままに、私は株式会社・総合美術工房と岩瀬石彫展覧館を設立することができ

た。私にとって石彫刻は、個人のこだわりを超えて地域に奉仕することであり、それ自身が人生を生き抜くことに他ならない。岩瀬を拠点にしたブルガリアの彫刻家との長きにわたる交流は、先生が示された道を歩んできた私の生き様そのものである。

師に応えてきた彫刻人生

小金丸先生に初めてお会いしたのは一九七五年、ちょうど私が東京の太平洋美術学校（現在の太平洋美術会）で学び始めた頃だった。学校で教授をされていた先生のご自宅を友人と訪ね、作家の道について話をうかがった。先生は、「彫刻家になるには、…時を見る目、チャンスを見極め、決断する力がなければ、いくら努力しても大成するとは限らない」とおっしゃった。この言葉は、今でも私の耳朶から離れない。先生は、二十二歳まで丁稚奉公をされ、その後職人として働き、三十歳を前に彫刻研究所で学ばれるなど、大いなる決断力をもってご自身の人生を切り拓いてこられた。先生のご経歴と自らの境遇の不思議な重なりを見た私はそ

のとき、「先生のおっしゃる通りにすればやっていける」と確信した。そして、翌年から先生に師事することに決め、その後、先生の勧めで石彫の世界に足を踏み入れたのである。

当時、身寄りも後ろ盾もなかった私は、日記に書きとめた先生の言葉のとおりにつとつ実践していった。ある日、「石彫刻の講座を開け」と突然言われたことがあった。ただ呆然とする私に対して、「素人に講座が務まるのか」と嘲笑する人もいた。それでも数人が参加してくださった。そして、参加者と向き合ううちに、教えるのではなくともに学べばよいのだと考えるようになった。また、展覧館を開館する際に、二千枚のダイレクトメールを書いて関係者へ郵送したこともあった。通信手段が限られていた当時、ダイレクトメールを一枚一枚書くことは骨の折れる作業だった。ただ、その受取人が実際に展覧館に足を運んでくださったときは、それまでの苦労が報われた思いがした。それは、真心に対して真心で応えてくれる人は必ずいるのだということを、心の底から味わえたときだった。

地元の方々に私の活動を知ってもらうために、手作りのカレンダーを持って石材店を何軒も回ったりもした。先生は「石を知っている人間は、石彫作品の写真が入ったカレンダーを絶対に捨てない」と声をかけてくださった。本当にそのとおりだった。職人や作家に関係なく、石を扱う者としての誇りがある限り、私たちはどこまでもつながり合えることを学んだ。さらに、陶器市で「石を叩いてこい」と言われ、何十万もの人々が行き交う路の上で彫る姿をさらしたときもあつた。すると、三、四年目には、彫刻家が足を止めてくれるようになった。周りの視線がどうであれ、真剣に石を彫り続ければ、誰かを引きつけるほどの緊張感と凄みを必ず生み出せるのだと、身をもって経験できた。

このように私は、先生から、彫刻の技術そのものよりも、一彫刻家として「人や社会にいかに向き合って生きていくのか」を教えていただいたような気がする。先生がおっしゃったことを一つひとつ達成するたびに、報告できたことが私は何よりも嬉しかった。そして、先生が新たに何かを口にされれば、「今度もやってみせ

よう」と決意できた。こうして、彫刻家の道を先生の示されたとおりに進むうちに、結局は彫刻の技術も磨かれていき、やがて地元や海外の方々ともつながることができたわけである。とりわけ、私の人生の大部分を占めるようになったのが、ブルガリアの彫刻家との石を通じた文化交流である。

ブルガリア彫刻家との対話

小金丸先生にお会いして十年目の一九八五年、「第七回ブルガリア・ガプロヴォ国際ビエンナーレ」で、私は思いもかけず金賞を受賞することができた。「授賞してくださった方々にお礼をするように」と先生に言われるがまま、私は在日ブルガリア大使館を通じて、展覧会の主催者であるガプロヴォ美術館に寄付をさせていただいた。さらに、ブルガリアの彫刻家を日本に招聘することを同大使館に申し出、一九九四年から「アーティスト・イン・レジデンス―石彫千年の交感」という国際交流プログラムを開始することになった。このプログラムは、おもにブルガリアで活躍する作家とそ

の家族を岩瀬のアトリエに一カ月招待し、地元のを石を用いてともに作品を創るという取り組みである。石彫分野では日本で初めての文化交流のかたちということ、開始当時から、県内外の多くの方々に注目していただいた。岩瀬では、この二十四年間で計十回のプログラムを行い、実に九名の作家をブルガリアからお呼びすることができた。プログラムは、作家とその家族が、帰国後も岩瀬での思い出を永く語り合えるようなものになっている。

池田大作創価学会インタナショナル会長とアクシニア・ジュロヴァ博士の新対談「大いなる人間復興への目覚め」で紹介された彫刻家イヴァン・ルセフ氏とは、第四回「アーティスト・イン・レジデンス」(二〇〇〇年)で一緒にした。一九五四年生まれのルセフ氏はソフィア美術アカデミーを卒業後、数々の国際彫刻展やシンポジウムで活躍されているブルガリアを代表する著名な石彫家である。若い頃から石彫の才能を発揮し、第四回ブルガリア青年美術展彫刻部門賞(一九八二年)、サローツ彫刻シンポジウム最高賞(一九八五年)などを

受賞。彼の作品は、ブルガリア国立美術館をはじめとする国内の多くの美術館や、スペインやドイツといった国々の美術館やプライベートコレクションにも収蔵されている。

ルセフ氏は、石の素材に対して鋭い洞察力をもち、それによつて石に隠された表情を巧みに引き出すといわれている。そして、光と闇、生と死の対話を通じて、悠久の時間と死の魂を、人物や風景形象のうちに浮かび上がらせるのだという。岩瀬のプログラムでは、「硬い石を使つてどのようなコミュニケーションが可能なのかをお見せしようと思った」と語つてくれた。そして、彼の作品「虹」と私の作品「石に遊ぶ」(写真)をはじめ、これまでのブルガリアの石彫家による作品を石彫展覧館に展示し、多くの方に鑑賞いただくことができた。ルセフ氏からも、「人々の目に数多くふれられるような野外展示は、石彫の新たな技術を見出す方法として見事な取り組みだ」との賛辞をいただいた。

さらに同展覧会の小冊子には、アクシニア・ジュロヴァ博士が万感胸に迫るメッセージを寄せてくださつ

No Image

[虹] イヴァン・ルセフ (H1600×W4000×D600、撮影：中尾 博)

た。博士が注目されたのは、素材となる石そのものを敬うという考えと、石のなかに閉じ込められた沈黙と知恵という昔ながらのコンセプトだった。そして博士もまた、私とルセフ氏の魂のコミュニケーションによって「何も語らない石が永遠の命を吹き込まれた」と述べてくださった。石彫刻には、作家が対話の機会を与えられ、それを通して新たな技術や命が生み出されるという大いなる可能性を見ることが出来る。ルセフ

No Image

(H1370×W1300×D700、撮影：中尾 博)

「石に遊ぶ」浅賀正治

No Image

〔キリかな〕 浅賀正治 (H500×W600×D300)
キリル文字38字とひらがな51字をともに刻んだ石の種

「氏と私は、ジュロヴァ博士が示されたとおり、まさに魂と魂の対話を通じて、あらゆる違いを超えた深い部分でつながることができたと確信している。」

「アーティスト・イン・レジデンス」のプログラムは、行政や他団体による支援を受けず、全て私自身の負担で行ってきた。ここでは、立派な料理でもてなしたり、観光してもらったりするよりも、互いに真剣に向き合って作品を創ることに注力できる。だからこそ、多くの石彫家が、彫るなかで新しい考えを生み出すことができ、そのやり方に共感してくださったのだと思う。なかでも、石彫にかける私たちの思いに対して、真摯に応えてくれたのがルセフ氏だった。彼はさっそく、プログラムが行われた翌年の二〇〇一年、ブルガリアの石の街であるイリデンチに、岩瀬の派遣団を招待してくれた。イリデンチにはルセフ氏が設立した石のアートセンターがあり、素晴らしい野外彫刻庭園が広がっていた。ルセフ氏は、「(日本人の)友だちにブルガリアに来てもらうという夢が叶い、忘れられない思い出ができた」と心の底から喜んでくれた。

No Image

ジュロヴァ博士に展覧会の小冊子について説明する筆者（2004年）

実は、このルセフ氏が声を上げたことがきっかけで、ブルガリア国内で私に対する授賞の機運が高まったとうかがった。二〇〇四年、岩瀬石彫展覧館とブルガリアとの石を通じた多岐にわたる国際交流活動に対し、光栄にもブルガリア共和国名誉証をブラゴヴェスト・センドフ駐日大使（当時）よりいただくことができた。また同年、在日ブルガリア大使館の庭園に私の作品「キリカナ」（写真）を設置していただけた。さらに、ソフィアにある文化省を表敬訪問し、ボジタール・アブラシエフ文化大臣（当時）に茨城県知事と県国際交流協会のメッセージをお渡しすることもできた。その後、一民間人である私の外交活動に対し高い評価をいただき、最高位賞にあたる「ゴールデン・センチュリー賞」を、ブルガリアの著名な彫刻家でもあるヴェジデイ・ラシドフ文化大臣より二〇一一年にありがたくも受賞することができた。

何よりも、ルセフ氏とのつながりがきっかけで、ジュロヴァ博士とも懇意にさせていただいたことは私にとって大きな喜びである。私が創った獅子の像をルセ

フ氏に寄贈したところ、ルセフ氏は「ジュロヴァ博士にさしあげる」といつて喜んでくれた。そして、ブルガリアの外務省内で展示会を行った際に、ジュロヴァ博士にもその獅子の像を見ていただくことができた。博士にお目にかかると必ず、池田会長の素晴らしさと、名誉会長との対談集『美しき獅子の魂』について嬉しそうに語っておられた。この度の対談で、ルセフ氏に続き私のことを紹介してくださった博士に対して、深い感謝の気持ちを申し上げたい。

平和を刻み解読する器としての石

ブルガリアの石彫には、社会主義体制のなかで連続と受け継がれてきた「バルカンの魂」が息づいている。ブルガリアでは、社会主義時代に建てられた巨大なモニュメントを多く目にする事ができる。かつては、国立大学の狭き門をくぐった学生だけが、国のモニュメントを彫るための基礎技術を学ぶことができた。大学が求める技術レベルに到達するまで学生は卒業できない——それほど、極めて厳格な国家的教育が徹底さ

れていた。教える側には学生の才能を見抜く力が求められ、学生には国の芸術家としてのプライドが育まれた。とりわけ国民の目につきやすい巨大な石彫のモニュメントは、彫り手の野心を掻き立て、他の彫刻家の競争心を煽る存在だったといえる。

ブルガリアの彫刻家もついていたそのようなプライドは、バルカン地域に暮らす人々の誇りに直結していた。ブルガリアでは、トルコをはじめとする強大な国々に囲まれた地理的状况ゆえに、その土地固有の文化を守ろうとする堅固さが培われた。「民族の魂を刻むために日本に来た」という彫刻家の言葉も、「私は故郷のバルカン地域が大好きです」というジュロヴァ博士の言葉も、そのような誇りから出たものに違いはない。バルカンの「獅子の魂」は、彫刻家ののみ先に、そして文筆家であるジュロヴァ博士のペン先に宿ってきたわけである。池田会長はジュロヴァ博士との対談のなかで、民族の精神と愛国心からくる獅子の魂に対し、平和のために恐れず立ち向かおうとする人間性をもって共鳴された。

私もまた、小金丸先生から教えていただいた「平和への誓い」をもって、石彫を通じて他の彫刻家と対話してきたつもりである。石彫の作品というのは、野外に置かれ、長きにわたって動かされることなく不特定多数の人々の眼前にさらされる。それゆえ彫刻家にとって、作品に対する批評や他の彫刻家との間にある緊張感は計り知れないものがある。そのような葛藤のなかで、自身に対して「私は何のためにいるのか」と問い、作品をこの世界に残すという重要な意味と向き合う。そして、あらゆる主義を超えて、平和という普遍的なテーマをそれぞれの彫刻家が目指していくのだと思う。石彫に対する考えの違いを互いに認め合い、他の彫刻家のやり方をそのまま真似するのではなく、自らのおかれた立場でできることを進めていくこと。私たち彫刻家は、同じ彫刻家としてぶつかり合うなかで、新たな平和の石彫文化を創造できるのかもしれない。

石彫刻の作品は、過去につけられた意味を平和のメッセージに変換する可能性をもっている。小金丸先生は、「石は命の器」であり、石に刻まれた「不変の思い

は平和の誓いとして解説され、生き続けていくもの」とおっしゃった。たとえば、エジプトのピラミッドに感動したナポレオンは、そのアイデアをもとにパリに凱旋門を造らせた。当時は権力を象徴していたはずの凱旋門も、時代とともにその解釈が変わり、今では別の意味で捉えられている。戦いの象徴とされた石、たとえば数々の城の石垣に対してさえ、平和という解読を求めるしかない——「石はそういうものだ」と先

「平和の誓い」小金丸幾久

No Image

生は語られた。石彫刻のミニュメントはその地に根づき、永遠にそこにあり続ける。だからこそ、石に平和の誓いを刻み込み、それを平和の象徴物として解読していくことは大きな意味をもつのだ。

真似する先に見えてくるもの

今日、石のミニュメントは限られた人たちの手で建てられるだけでなく、一人ひとりが創る時代へと向かっている。先生より、「素晴らしい環境と熱い一人がいてともに学びあう所、そこは既に学校である」との教えを受け、石を生業とする人々とともに「石の学校」の推進に尽力してきた。ここでは、先に述べた「アーティスト・イン・レジデンス」をはじめとする国際交流や学芸活動、子どもから大人までを対象とする石彫体験教室や高校における総合学習のなかでの制作など、交流活動や人材育成活動を多く行ってきた。私にとつて、地元や海外の方々とともに創り奉仕することこそが、私の生きる道であり、先生にお応えする道である。私は今こそ、一人の石彫家として、小金丸先生から

学んだこと、先生の心をしっかりと後世に残していきたいと思う。聞いてただ理解するのではなく、「先生を超えるのだ」との思いで実践してかたちに残すことである。これまで約七百の彫像を創られたと先生から伺った私は、その数を超えてみせるという気概で石彫刻に挑んできた。そして、ついに七百の作品を超えることができたのだが、先生が七百とおっしゃった本当の意味を先生が亡くなられて知った。それは、七百以上と口にするのと嘘に聞こえてしまったため、あえて作品数を七百にとどめていたというのだ。

先生を超えることはなかなかできないし、先生の偉業にはとうてい及ばない。しかし、生き方や作品を「真似し（跡をなぞり）」ながら、少しずつ先生のお考えの「水かさ」を増やしていくことはできる。「トレーニングはトレーシング」である。なかには、「真似だけではうまくいかない」と批判する人もいるだろう。しかし結局は、「誰を真似するのか」ということが重要になる。私は、真似するに値する人の生き方や作品を一心に真似し続けることでその人の考えを広げ、やがてその人に

近づくことができるかと信じている。その意味で、小金丸先生は、生き方や作品を真似するに値する偉大な人物である。

先生は、他からの援助を一切受けずに、自分の力でご自身の人生を歩んでこられた。作品についても、自分の型や考えを他人に納得させるのではなく、「誰のために創るのか」ということを常に胸に抱いていらっしやう。履物にたとえるなら、最初から下駄をおもちだったわけでも、どなたかから下駄を貸してもらったわけでもない。ゆっくりとはだして険しい道を歩まれ、やがて自分で編まれた草履を履き、立ち止まることなく歩みを進めてこられた。道の途中で「小金丸が彫っているのは稚拙な芸術」だと揶揄されることもあっただろう。しかし、着実に前進を続けられ、ついには草靴まで履かれるようになり、支えてくださった方々への恩返しの人を送られた。両目のバランスが命だとされる彫刻の世界にあって、先生は四十歳で片目の視力を失われたが、たいへんな訓練を重ねて制作を続けられた。八十九歳で亡くなられるまで、とにかく「真

剣の人」でいらっしやう。

私も、先生ほど真剣に生きてきたとはいえないが、「誰のために創るのか」ということを忘れず、先生に喜んでいただこうと努めてきた。「先生に認められさえすればそれでよい」との思いで、小さなことにも充実感を味わってきた。その積み重ねによって、私は知らず知らずのうちに大きな壁を乗り越え、私なりに人生の高みに上ることができたのだ。二十年書き続けた日記を読み返し、ようやく先生に「自分の生き方が見えてきたか。石彫がわかってきたか」と言っていたいているような気がする。現在、地元の高校で石彫刻を教えている。二十年後のいつの日か、教え子が石彫刻に大きな意味を見出し、気づけば高みに上っていたといえる人生を送っていただけるように願っている。それが新しい人材の育成であり、真理をつかむことなのだ。

おわりに——恩を石に刻むこと

「人類の歴史は石に刻まれ遺った」——師匠・小金丸先生はこうおっしゃり、石彫刻のもつ意味や使命につ

いてさまざまな角度から教えてくださった。地球上のあらゆる文化の起源を辿るとき、やがて石造文化のなかにその原点を発見することになるといふ。それはまさに、石のなかに込めた先人の熱いメッセージとして今も生きている。私にとって石彫刻は、私に生を照らしてくださった小金丸先生への恩を、歴史の一つとして刻み遺すことである。そして、私を支えてくださった岩瀬やブルガリアの人々に対する感謝を表明することである。石に刻まれた平和への誓いと報恩の心が時代や国境を超えて広がり、彫る人や見る人の心に届くように、私はこれからも石彫刻に挑戦していく。

大変なことに挑んでいる姿そのものは自分には見えないが、幸福の姿なのです。その姿が、人生が、人々に感動を与える。だからもともとと挑戦してください。（小金丸先生からいただいた二十一世紀の

指針）

（あさが まさこ）／彫刻家